

桂川町出身の小説家

松尾清貴さん

9月22日から全国ロードショーされた映画『真田十勇士』の小説版を書いたのは桂川町出身の小説家松尾清貴さんです。『偏差値70の野球部』などのヒット作で知られる松尾さんに、桂川町の思い出などのお話を伺いました。



profile

1976年桂川町（内山田）生まれ。2004年『簡単な生活』でデビュー。『偏差値70の野球部』は、シリーズ累計60万部を突破。



——松尾さんの子どもの頃のことを教えてください。

泉河内小学校（注：嘉麻市・平成26年に閉校）が近かったので、近所の子どもたちとサッカーなどをしてよく遊んでいました。

桂川中学校へは自転車通学でした。帰りの道の登り坂は辛かったですね。田んぼや川に挟まれた道路を通ると、今も通学を思い出します。冬の朝の寒かった感覚や、霧が掛かっている山の風景などは覚えてます。

——小説家を志したきっかけはありますか。

小学校の卒業文集には、将来の夢「小説家」と書いてあります、確か。

なに考えていたのか、さっぱり覚えていません。子供が言うことですから深く考えてなかったのでしょうか。本は好きだったと思いますよ。

中学生くらいを対象にした児童書という依頼で書き始めたシリーズで、小難しい理屈は抜きに楽しめる、忍術、妖術、合戦絵巻が入り乱れ、歴史と伝説、俗説がたくさん絡み合ったエンターテインメント小説として作っているつもりです。

小学館発行の『真田十勇士』は、映画脚本を元にした小説です。この映画版の方は、一昨年に上演した舞台作品を原作としています。

——最後に、桂川町に対する印象や想いを聞かせてください。

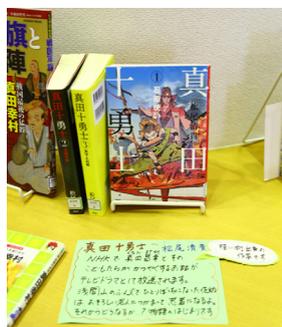
平凡な武将真田幸村は、なぜだか世間から名将だと思われている。偶然知り合った猿飛佐助から「あんたをホンモノの名将にしてやる」と持ちかけられ、佐助が集めた仲間たちとともに大坂へ向かう。と、そんな物語です。

早くに実家を出た自分には、桂川町は、やはり「帰ってくる場所」という印象です。山や川、田んぼの風景は、十分見知ってもう珍しくもないのに、そうした変わらない景色を見てホッとできるのは、幸福なことだと思います。

——映画脚本にしたものとは別に、松尾さんオリジナルの『真田十勇士』も書かれているそうですが。

ここで生まれて育ち、いまは別のところで過ごしている自分には、桂川町の印象はずっと変わらず、いつまでも懐かしい場所であり続けるでしょう。

理論社発行の『真田十勇士』はオリジナル作品です。映画の小説版とは全く内容が違います。



▲松尾さんオリジナルの『真田十勇士』は町立図書館でもポップで紹介。全6巻の予定で、第5巻は10月に発売。



▲松尾清貴さんが小説版を書く、映画『真田十勇士』は、全国大ヒット公開中！（監督：堤幸彦、出演：中村勘九郎／松坂桃李／大島優子ほか） © 2016「真田十勇士」制作委員会